

ルカ福音書の9章(51節)からイエス様は弟子たちと共にエルサレムへ向かう旅を続けてこられました。そして今日の箇所ではいよいよ旅のゴールであるエルサレムに近づいていけます。エルサレムの東にはオリーブ山があります。その山の東斜面のふもとにベタニアという町があります(エルサレムから3キロメートル程の距離)。そしてさらにエルサレムに近い場所にベトファゲという町がありました。これらの町に近づいたとき、イエス様は二人の弟子を使いに出されました。おそらくベトファゲに遣わされたのだと思われます。そうしてイエス様は弟子たちにご自分が乗るためのろばを準備をさせたのです。

その準備の仕方は変わったものでした。イエス様は弟子たちに次のように言われました。

「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどこいて、引いて来なさい。もし、だれかが、『なぜほどくのか』と尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」

イエス様はその町に入る前からそこに「まだだれも乗ったことのない子ろばがつかないである」のご存じでした。そして実際弟子たちが出かけるとイエス様から言われた通りでした。ろばの持ち主たちから「なぜ、子ろばをほどくのか」と言われると、弟子たちはイエス様から言われた通り「主がお入り用なのです」と答えました。ここで「主」と訳されている言葉は原文では「その主」すなわち「ろばの主」を意味する言葉です。そして「主」とは33節の「持ち主」と同じ言葉です。すなわち、弟子たちはろばの持ち主に向かって「ろばの主人(持ち主)がそれを必要としているのです」と答えたのです。これは不思議なやり取りです。なぜイエス様はそのような言葉をもってろばを準備させようとなされたのでしょうか。それは創世記49章10節11節の光に照らして考えると分かってきます。そこにはこうあります。

「王笏はユダから離れず、統治の杖は足の間から離れない。ついにシロが来て、諸国の民は彼に従う。彼はろばをぶどうの木に、雌ろばの子を良いぶどうの木につなぐ。彼は自分の衣をぶどう酒で、着物をぶどうの汁で洗う。」

ユダ族から「シロ」という王が現れ、その王にはイスラエルだけでなく、諸国の民が従うと預言されていました。さらにその王は自分のろばをぶどうの木につなぐと言われていました。イエス様はご自分がそのように預言されていた王であると示されたのです。

そうしてイエス様はろばに乗ってエルサレムに入っていくのですが、それはゼカリヤ書9章9節の御言葉が成就するためでした。

「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者、高ぶることなく、ろばに乗って来る、雌ろばの子であるろばに乗って。」

この預言がイエス様において実現されたのです。イエス様は軍馬にまがり、自分の軍事力で勝利する王ではありません。神に従い、神から勝利を与えられる王です。そして「高ぶることなく(柔和で謙遜な)、ろばに乗って来る王」なのです。そしてこの王のご支配によってこそ、真の平和が実現します。それはゼカリヤ書9章10節で「わたしはエフライムから戦車を、エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ、大河から地の果てにまで及

ぶ」と言われている通りです。軍事力によっては真の平和は実現しません。このキリストというろばに乗った王のご支配が世界の果てにまで及ぶことによって、武器のない真の平和が実現するのです。イエス様はご自分がそのような王であることを、ろばに乗ってエルサレムに入られることによってはっきりと示されたのです。

イエス様がろばに乗って進んでいかれると、弟子たちは自分たちの服を道に敷きました。これはイエス様を王として迎え、そのイエス様に敬意と服従を表わす行為です（列王記下 9:13 参照）。そしてイエス様がオリーブ山の下り坂にさしかかれたとき、すなわちエルサレムが見える山の頂上にたどり着いたとき、弟子たちの興奮と熱狂は最高潮に達しました。それゆえ弟子の群れはこぞって、これまで自分たちが見てきたあらゆる奇跡を思い起こして喜び、声高らかに神を賛美し始めました。

「主の名によって来られる方、王に、祝福があるように。天には平和、いと高きところには栄光」と。

前半部分は詩編 118 編 26 節からの引用ですが、「王に」という言葉が付け加わっています。弟子たちはイエス様を主の名によって来られた王とみなし、ほめたたえたのです。そして後半部分の「天には平和、いと高きところには栄光」という言葉は、クリスマスの夜、天使の大群が歌った賛美と響き合っています。その賛美は「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」というものでした。両者を比べると「いと高きところには栄光」という部分は共通しています。しかし天使は「地には平和、御心に適う人にあれ」と歌ったのに対し、弟子たちは「天には平和」と歌いました。弟子たちとしては神様がおられるところに栄光があり、平和もあるという気持ちで歌ったのではないかと思います。しかしその背後には、この時イエス様がもうすぐ天に上られるということも関係していると思われる。イエス様が地上にお生まれになったときは「地には平和」と歌われ、間もなく天に上られるときには「天には平和」と歌われたのです。すなわちイエス・キリストという王がおられるところに平和がある、ということです。

しかしこの賛美を聞いて気に食わない人たちがいました。ファリサイ派の人々です。彼らは群衆の中からイエス様に向かって言いました。

「先生、お弟子たちを叱ってください」。

彼らはイエスを王とは認めておらず、弟子たちの歌は神を冒瀆するものだと思ったのでしょう。しかしイエス様は次のようにお答えになりました。

「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす。」

もし弟子たちが黙ったとしても、道端に落ちている石ころが代わりに叫び出すだろう。イエス様はそうに言われたのです。そのようにイエス様は弟子たちの賛美を擁護されました。そしてそれ程、弟子たちの賛美はこの時どうしても歌われなければならないもの、それ程に神様が求めておられるものであったということでしょう。

そしてこのことが私たちにも求められていることでもあります。イエス様はエルサレムで殺されてしまいましたが、神によって復活の勝利を与えられ、天に上り、今は神の右に座して、全世界を治める権能をすでに授かっておられます。このお方こそ、真の平和を実現してくださるろばに乗った王であり、全世界の民が従うべき王です。このイエス・キリストを自分の王として受け入れるか否かが私たちに問われています。私たちはあの弟子たちと共に、イエス様を主の名によって来られた王として喜んでお迎えし、イエス様を通して神がなして下さった救いの御業を覚え、神を賛美しつつイエス様に従っていきたいと思います。